

## 最近の沖縄県の脳性麻痺の実態調査

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅  
ケアシステムに関する研究)

研究協力者 落合靖男

**要約：**新生児のなかで周産期異常が主な原因である脳性麻痺の在宅システムは、沖縄県は各保健所を中心に形の上では整いつつある。しかし、内容的な面では充実させるべきことも多く、今回は最近の脳性麻痺の発生の実態を調べたので報告する。

**見出し語：**脳性麻痺(CP)、発生頻度、未熟児

**研究方法：**沖縄県で発生した昭和58年から62年生まれの子のCP児の発生数、発生頻度および未熟児出産との関係について検討した。

**結果：**1) 沖縄県のCP児の年別発生数、発生率

CP児の各年別の発生数(出生人口1,000名あたりの発生頻度)は58年は26名(1.2)、59年は37名(1.8)、60年は43名(2.0)、61年は42名(2.0)、62年は39名(2.0)であった。

2) 未熟児CPの年別発生数

未熟児出産が原因と考えられるCPの発生数を昭和53年から57年の5年間で58年から62年の5年間で合計を比較すると、999g以下では53年から57年の5年間で1名、58年から62年の5年間で16名、1,000g～1,499gでは16名と30名、1,500g～1,999gでは22名と32名、2,000g～2,499gでは7名と28名といずれも

58年から62年の5年間のCP児の数が増加している。

3) 沖縄県の新生児死亡率と未熟児出生数

沖縄県の新生児死亡率は漸減の傾向が見られ、52年までは出生人口1,000人に対し7%前後であったのが、53年には5.0%前後、56年以降は4.0%前後と減少した。

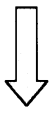
一方未熟児出生率は57年までは減少の傾向にあったのが、58年以降は増加しており、53年から57年間の5年間で58年から62年の5年間で未熟児出生数を比較すると、999g以下では143名対210名、1,000g～1,499gでは399名対490名、1,500g～1,999gでは1,185名対1,125名、2,000g～2,499gでは5,053名対5,394名と999g以下、1,000g～1,499g、2,000g～2,499gでは58年から62年の5年間の出生率が有意に高かった。

4) 未熟児発生率の年推移

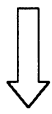
未熟児CP児を出生体重999g以下、1,000g～1,499g、1,500g～1,999g、2,000g～2,499gに分けて53年から57年までの5年間の発生率と58年から62年までの5年間の発生率を比較したところ、いずれも58年から62年までの5年間の未熟児CP児の発生率が高かった。

**考察：**新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムを心身障害児にかぎっているならば、沖縄県では保健婦駐在制をとっているのですべての未熟児は在宅訪問を受けており、また問題のありそうなケースは地元の保健所の発達クリニックを受診し、必要ならそこで訓練を受けられるシステムはできている。しかし在宅ケアを質的な面から考えた場合、検討すべき多くのことが残っている。今回在宅ケアシステムを再検討するために最近のCP児の発生数、発生率を調査した。

沖縄県の新生児死亡率、未熟児出生率を調べると、新生児死亡率は減少の一途をたどり56年以後は出生人口1,000人に対して4.0台となった。一方未熟児出生数は58年以後やゝ増加している。しかも体重別の出生率をみると、1,500g以下の極小未熟児（特に999g以下の超未熟児）の出生率が高くなっている。また未熟児出生が原因と考えられるCP児を出生体重別で比較したところ、いずれの未熟児も53年から57年の5年間の発生率に比べ、58年から62年の5年間の発生率が高かった。未熟児CP児の発生率を出生体重別でみると、58年から62年までの5年間では999g以下では出生人口1,000に76.2人、1,000g～1,499gでは61.2人、1,500g～1,999gでは284人、2,000g～2,499gでは5.2人であり1,999g以上のCP罹患率が高いことがわかり、未熟児の在宅訪問が大切であることがわかる。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:新生児のなかで周産期異常が主な原因である脳性麻痺の在宅システムは、沖縄県は各保健所を中心に形の上では整いつつある。しかし、内容的な面では充実させるべきことも多く、今回は最近の脳性麻痺の発生の実態を調べたので報告する。